

## SPERT公募プロジェクト研究報告 共通体育における成績評価に関連する問題の検討

著者	榎本 靖士, 松元 剛, 吹田 真士, 鍋山 隆弘, 金谷 麻理子, 奈良 隆章
著者別名	Enomoto Yasushi , Matsumoto Tsuyoshi , Suita Masashi , Nabeyama Takahiro, Kanaya Mariko, Nara Takaaki
雑誌名	大学体育研究
号	36
ページ	87-90
発行年	2014-03
その他のタイトル	Project Report The problem on the grade for physical education classes in the Univesity curriculum
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124278">http://hdl.handle.net/2241/00124278</a>

## 共通体育における成績評価に関連する問題の検討

榎本靖士<sup>1)</sup>, 松元 剛<sup>1)</sup>, 吹田真士<sup>1)</sup>, 鍋山隆弘<sup>1)</sup>,  
金谷麻理子<sup>1)</sup>, 奈良隆章<sup>1)</sup>

### 体育授業の目標

体育は小学校から大学まで教科として位置づけられ、学習目標と内容が定められている。大学における体育（共通体育）では、大学独自に適切に定めることが求められ、生涯スポーツに向けた独自のカリキュラムが構築されている。一方で、近年の子どもの体力低下や成人の生活習慣病患者および予備群の増大に関する問題は国民のQOLに関わる重大な課題として取り組まなければならない現状にある。そのため、大学における体育も以前のスポーツ活動の行ない方や楽しみ方を学び、生涯スポーツにつなげるという目標だけではなく、フィジカルリテラシー（身体活動を維持するための意欲、自信、身体能力、知識と理解）を育成するという目標が重要となっている。

しかし、教科として学習目標が明確化されるということは、一方でその学習成果も厳格に求められる。これは近年の大学教育における成績評価の厳格化の流れと重なるところである。大学教育の成績評価の厳格化は、大学教育の質の向上と教育カリキュラムや教育体制の見直し、そして大学教育の成果を社会に還元するという様々な観点から重要性が指摘されており、その大学での学習評価の総合評価としてGPA（Grade Point Average）制度があり、本学においても本年度から実施されている。

### 成績評価の厳格化

GPA制度の利点と欠点はすでに多くの議論がなされているところであるが、体育において到達目標が明確でないなか、成績を相対評価するのか、絶対評価するのかの問題が取り上げられる。GPA制度を確立するためには、同じ科目で異なるクラス間で成績の評価基準が異なるようでは大学全体のカリキュラム問題となってしまう。そのため、成績を厳格化するためには、成績評価の規準と基準が定まっていなければならない。すなわち、何を評価するのか（学生に何を身につけさせようとしているのか）とどの程度を良し、悪しとするのか（どの程度身につけさせようとしているのか）を明確にしておく必要がある。この評価規準と基準が適切でなければ、教員の意図と学生の学習活動との間に齟齬が生じたり、評価が適正に行なわれなかったりするであろう。具体的には、成績評価がすべてのものがA以上の良い評価になる可能性が出てくるのである。これは教員の指導力と生徒の学習成果によるものかもしれないが、一方で評価規準および基準の見直しが必要であることを意味しているかもしれない。これらの絶え間ない見直しにより、妥当性の高い成績評価に近づくことが期待される。そして、絶対評価であるものの、学習者の偏りや授業の成否に多少の変動はあるもののおおよその成績分布が安定するはずであろう。これが全学で統一されようとしている成績評価の分布目標と解釈されよう。

1) 筑波大学体育系

## ルーブリックとスタンダード

成績評価の信頼性を高めるために、ルーブリックを用いることが役立つと考えられている。ルーブリックとは、単純な知識や理解の評価とは異なり、点数化しにくいパフォーマンスや、達成度などの学習成果について、評価規準にそって尺度ごとの基準を記述したものである(表1)。前述したように成績評価の厳格化と信頼性および妥当性を高めるためのスタート地点とも言えよう。このルーブリックを学生に示すことで学生に授業で身につけさせたい事項を理解させ、授業を行ない、成績を評価すること、またこのルーブリックを見直すことができる。各授業のルーブリックのみばかりでなく、基礎体育さらには共通体育全体でルーブリックを作成し、学生に身につけさせるべき評価規準と基準が定まっていくことがスタンダードと呼ばれるものであろう。本学も多くの教育組織においてスタンダード作りが進んでいる。スタンダードの実質化のためには、学習目標ばかりでなく、成績評価との連動が必要で、スタンダードが組織的に見直しできることが望ましいであろう。

## 学習の質保障と学習支援

成績評価を厳格に行なうためには、成績評価の問題ばかりでなく、同時に学習の質、つまり授業の教授内容や教授方法がある一定の効果を

保証でき、かつ授業時間内外における学習者への学習支援が必要であらう。すなわち、学習困難者に対する的確な学習支援が必要であり、この保証のもと成績評価の厳格化が実行できるのであろう。様々な学習支援の形態があるものの、(例えばTAの活用もその1つである)本学で取り組んでいる電子ポートフォリオが役立つと考えられる。ポートフォリオは学習履歴のことで、学生の学習記録(学習要点の記述、レポートや提出課題など)と教員の指導と評価の記録などで構成されるものである。これを電子媒体で行なうものを電子ポートフォリオと言い、本学では平成25年度まではMoodleが用いられていた(平成26年度からMANABAというシステムに変更される)。

表2は、秋学期基礎体育ジョグ&ウォークのシラバスに示されている授業計画である。さらに表3は、授業計画にそって学生に課した学習課題である。

課題1は、授業でストライドの計測方法を実践した後、学生が日常生活で行なっている移動におけるストライドの大きさを計測し、報告するものである。課題2は、ウォーキングの楽しみ方を実習したのち、万歩計を用いてある典型的な一日の歩数を計測し、かつ一日の摂取カロリーと消費カロリーを計算するという課題である。これらのように、授業においてジョグ&ウォークの実技学習課題と並行して知識の習得や理解を深める課題を出すことで、学習を深め

表1

### ジョグ&ウォーク授業計画

- ・第1回:オリエンテーション
- ・第2回:ウォーキングとジョギングの基礎
- ・第3回:移動スピードとストライド・ピッチ
- ・第4回:ウォーキングの楽しみ方
- ・第5回:体力測定の振り返り
- ・第6回:ウォーキングとジョギングのフォーム
- ・第7回:ジョギングのスピードと身体の負荷
- ・第8回:ジョギングの取り組み方
- ・第9回:ゆっくり、長いジョギング
- ・第10回:まとめ 運動の効果と楽しみ

表2

### Moodle課題

- ・ストライドの計測
  - ・一日の歩数の計測と摂取カロリーと消費カロリーについて
  - ・体力の変化について
  - ・ウォーキングとジョギングのフォーム観察
  - ・心拍数160bpmに相当するペースの確認
  - ・一定ペースでのジョギングにおける疲労
  - ・最終レポート
- 「自身の現在の体力の現状と生活および運動習慣を分析し、今後の体力および健康を維持するための課題を、授業で学習した内容を踏まえて考察しなさい。」

させ、提出課題から学生の知識・理解を評価可能であるばかりでなく、態度・意欲についても評価できる。支援では、Moodleに毎回の授業内容を示しておくことで、学習内容の整理になるばかりでなく、欠席者への学習の助けになり、また欠席者が課題を提出する、すなわち評価を受けることも可能となる。

### 成績評価のグレーディングと分布

体育センターでは、平成24年度より観点別(規準ごと)に評価を行なっている。技能、知識・理解、態度・意欲の3観点である。そして、GPAの導入とともに成績評価の評語は90点以上がA+, 80点から89点がA, 70点から79点がB, 60点から69点がCでここまでが合格、59点以下がDで不合格となる。成績評価のためには60点から100点までを4段階に分類できれば評価としては十分であるが、少なくともこれを3観点にわけて4段階に評価するだけでも16段階に分類することになる。また3観点の重みも検討する必要がある、現在は、技能35%、知識・理解30%、態度・意欲35%としている。観点ごとに1点刻みで評価し、合計

の評点を算出し、対応する評語で評価することが考えられるが、現在は1回の欠席を5点の減点を目安としているので、これを目安に他の技能なども配点することになろう。

図1は、平成24年度と25年度のすべての学期(平成24年度は1~3学期で平成25年度は春と秋学期)の基礎体育「ジョグ&ウォーク」成績評価の分布を示したものである。平成25年度からA+が導入されているが、平成24年度も評点からAをAとA+に再分類している。平成25年度ではA+の割合が減少したもののAとA+の合計はあまり変化していなかった。

図2は、平成25年度の春学期と秋学期における成績評価の分布を示したものである。春学期ではA+とAの割合が合計で65%であったが、秋学期では60%となって、Bの割合が30%となっていた。評点に対する観点ごとの評価の相関係数をみると $r = 0.58$ から $0.81$ と統計的にみると観点ごとの評価の重みが偏っていなかったことが確認できる。

おわりに

成績評価の厳格化と学習支援が学習の質の向

表3

## 基礎体育「ジョグ&ウォーク」ルーブリック

	A+	A	B	C	D
技能	長い時間自分にあった負担で走り続けることができ、ペースや持続時間にあった効率よい動きができる	長い時間走り続けることができ、ペースや持続時間にあった動きができる	長い時間歩き、もしくは走り続けることができ、ペースや持続時間にあった動きができる	長い時間歩き、もしくは走り続けることができる	長い時間歩き、もしくは走り続けることができない
知識・理解	健康・体力を適切に評価し効果的に改善する適切な方法を理解し、自分の体力にあわせて効率よく運動を実践するための知識を有している	健康・体力を評価し改善する方法を理解し、自分の体力にあわせて運動を実践するための知識を有している	健康・体力を評価し改善する方法を理解し、運動を実践するための知識を有している	健康・体力と運動の関係について理解している	健康・体力と運動の関係を理解していない
態度・意欲	健康・体力について高い興味関心を持ち、ジョグ・ウォークを楽しむための技能および知識を積極的に身につけようとしている	健康・体力について興味関心を有し、ジョグ・ウォークを楽しむための技能および知識を身につけようとしている	健康・体力について考えることができ、ジョグ・ウォークを楽しむための技能および知識を身につけようとしている	ジョグ・ウォークを実践する技能および知識を身につけようとしている	健康・体力について考えが不足しており、ジョグ・ウォークに取り組もうとしない

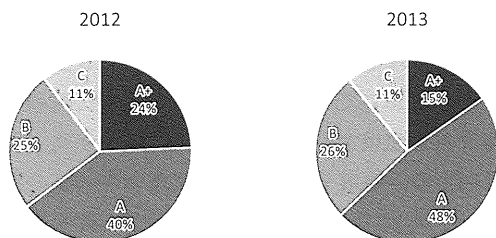


図1 基礎体育「ジョグ&ウォーク」の成績分布  
～2012年と2013年の比較～

上につながることを一連の考察により確認できた。すなわち、評価規準と基準を明確化し、ルーブリックとして提示すること、ルーブリックをもとにした評価、電子ポートフォリオを利用した学生と教員のインタラクティブな教育活動と学習支援が体育授業に位置づけられることを例示し、さらなる成績評価の検討が、評価方法の信頼性と妥当性を高めるばかりでなく、教育の質の向上につながることを示唆するものであろう。今回は基礎体育ジョグ&ウォークを例に成績評価を検討したが、多くの授業に対して行なうことで、共通体育の目標に準拠した到達目

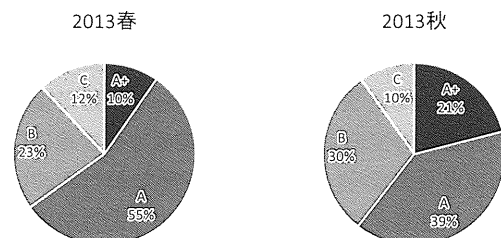


図2 基礎体育「ジョグ&ウォーク」の成績分布  
～2013年春学期と秋学期の比較～

標、すなわちスタンダード、そしてカリキュラム全体へのフィードバックとなり、発展的に体育授業を計画、実行、見直しのサイクルに置くことができると考えられる。そして、成績評価が授業への強いフィードバックとなり、シラバス、授業計画、授業内容の振り返りとなり、成績評価規準および基準の見直しも含めて授業の組織的な改善になると言えよう。

本稿は、平成24年度SPERT公募プロジェクト研究の一部を報告したものである。